

南京国際平和通信

第 66 号 (2025 年 4 月)

アメリカから日本軍の南京暴行資料を寄贈した

5月9日、アメリカ華人魯照寧氏による資料寄贈式が当館で行われ、日本軍の南京暴行を裏付ける 89 点（セット）の資料が公にされた。統計によると、氏が 2004 年から 21 年間連続で記念館に資料を寄贈され、累計は 2152 点（セット）に上る。



今回新たに収蔵された資料には、新聞、雑誌、書籍、画報、音声・映像資料などが含まれる。主に『ニューヨーク・タイムズ』『シカゴ・デイリー・トリビューン』『サンフランシスコ・クロニクル』『ニューヨーク・ワールドテレグラム』『セントルイス・ポスト・ディスパッチ』など 19 種

類の米国新聞に及び、様々な角度から日本軍の南京における暴行を克明に記録している。



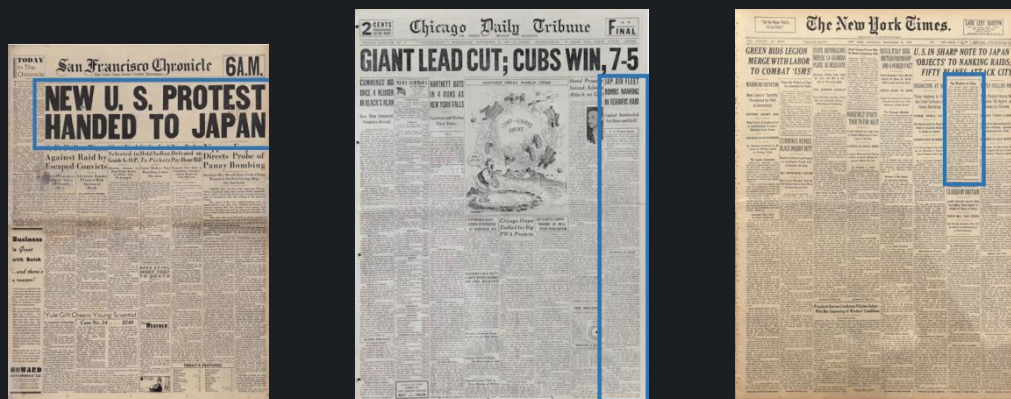
魯照寧氏が寄贈式でスピーチ

1937 年 12 月 18 日付『サンフランシスコ・クロニクル』紙第 2 面特集記事『シカゴ・デイリー・ニュース』は、中国特派員アーチボルド・スティー爾 (Archibald Steele) 記者が 1937 年 12 月 15 日に、米艦オアフ号から米国宛てに送った電報であった。「私たちがこの街を離れる間に目撃した最後の光景は、300 人の中国人が揚子江の堤防付近で組織的に処刑されるというものだった。その場所には既に膝ほどの深さまで死体が積み重ねられていた...これはここ数日の南京で繰り広げられている惨劇を象徴する光景である」と書いている。

1937 年 9 月 22 日付『シカゴ・デイリー・トリビューン』紙一面 (AP 通信) : 「日本は米国と英国の抗議を無視し、今日、この人口密集都市を威嚇するような激しい爆撃を 1 時間半にわたり実施した...爆撃機は火曜日午前 10 時 30 分と

午後 1 時 35 分、二回にわたってこの百万人規模の都市の上空で爆撃を行い、その攻撃は極めて苛烈であった。」

1937 年 9 月 23 日付『シカゴ・デイリー・トリビューン』紙報道：「50 機以上の日本軍航空機が空襲に参加し、街に 200 発以上の爆弾を投下した結果、200 人以上の中国民間人が死傷した。犠牲は主に市内で最も貧しい地域に集中した。多くの人が焼死し、下関揚子江岸にある貧民街の藁小屋はマッチ箱のようにあっという間に燃え上がった…街路には手足をもぎ取られ、焼け焦げた老人、女性、子供の遺体が散乱していた。」



国家記憶と国際平和研究院の研究員は、今回の史料が高い価値を有すると評価している。当該資料は日本軍が南京に対し約 4 ヶ月間にわたって実施した無差別爆撃の暴行を集中的に示す証拠であり、そして、南京大虐殺の暴行に関する国際社会での報道の中で、現存する最も初期の報道原本が含んでいるからだ。



国家記憶と国際平和研究院研究員楊夏鳴氏が資料を分析



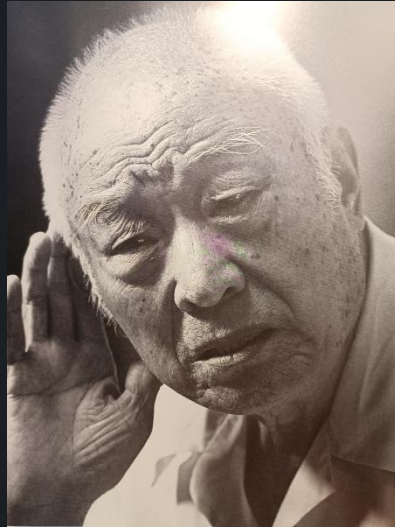
当館館長の周峰氏（右）が魯氏に収蔵証明書を授与した

追悼

5月2日、南京大虐殺生存者の劉貴祥氏が逝去した。享年95歳。5月15日、同じく南京大虐殺生存者の謝桂英氏が逝去した。享年101歳。

1937年、劉貴祥氏は7歳で小学校に入学したばかりだった。彼の父親は消防隊長で、体が丈夫で文武両道であった。日本軍が南京を占領後、氏の父親と弟が殺害され、この出来事が劉氏の人生を変えた。小学校卒しかできなかった氏が生前、「もし父が生きていれば、私はもっと教育を受け

られただけでなく、父から多くの技能を学べただろう」と残念そうに語っていた。



謝桂英氏は 1924 年 9 月生まれた。1937 年、彼女の家族は南京市下関区柵欄門 3 号に住んでいた。生前の回想によると、「日本兵が南京城に侵攻する前、母は私たち兄弟姉妹を連れて避難したが、父は家を守るために残った。日本兵が入城した後、父は日本兵に殺害された。」その後、謝氏の母親は子供たちを連れて苦難の生活を送り、その間謝氏は三度も死を逃れた経験があった。2002 年に、謝氏は日本を訪れ、複数の都市で開催された南京大虐殺証言集会に参加した。



証言集会に参加した謝桂英氏（右から二人目）



謝氏が2021年「南京大虐殺犠牲者家族追悼行事」に参加

南京大虐殺のような暴行が二度と起こらないことを願う

4月23日は第30回世界本の日だった。記念館は「読書：未来へと続く架け橋」をテーマとした読書イベントを開催した。南京外国語学校の生徒と教員が記念館を訪れ、職員とともに「南京大虐殺資料」に記された史実に基づく物語のリレー朗読を行い、歴史を銘記し平和の声を伝えた。

紫金草国際ボランティア・サミール（Sameer）氏とナブ

(Naf) 氏は英語でそれぞれ『ラーベ日記』『ミニー・ヴォートリンの日記』の一部を朗読した。ナブ氏は「南京大虐殺のような暴行が二度と起きないことを願っています。私は南京で見聞きしたことをよくバングラデシュの家族や友人に伝えています。彼らに歴史を知ってもらい、平和な生活を大切にしてほしいです」と語った。



館長周峰氏が南京外国語学校に歴史書籍を贈呈した

「この歴史が記録されていることを本当に嬉しく思う」
(“So glad people are recording this history”)

記念館がソーシャルメディアプラットフォーム Facebook および Twitter (X) に「Nanjing Memorial」アカウントを開設してから、2年以上が経過した。このアカウントが継続的に投稿している南京大虐殺生存者に関する動画や「写真で見る南京大虐殺史」ブログ記事は、ネッ

トユーザーから好評を博している。

ユーザー @Keting Zhao 氏のコメント：「このような記録と発信をしてくれていることを嬉しく思います。」

ユーザー @Tanisha Patel 氏のコメント：「素晴らしいお言葉です。過去を尊重することは、未来を守るための第一歩です。」

ユーザー @Bapi Mukherjee 氏のコメント：「歴史を忘れず、平和を大切にしよう。」



記念館訪問後、彼らはこう語った…

今年のGW中、記念館は世界各国から訪れる訪問者を迎えた。訪問を終えた若者たちが思いを語った。

パキスタン出身の国際ボランティア・フアン（Juan）氏：

「南京大虐殺の歴史は非常に暗い一頁です。私もここで見聞きしたことを語り、より多くの人に歴史を知ってもらい、平和を大切にしてほしいと思います。」

スイスからの訪問者パトリック・フィウ (Patrick Fiaux) 氏：「南京大虐殺の歴史は、人類の歴史的記憶において無視できない暗い一章です。私たち一人ひとりが歴史を伝えていく責任を持っています。」

アメリカからの訪問者ダミアニ (Damiani) 氏：「この記念館は南京大虐殺の歴史を知る上で重要な場所です。訪問して非常に衝撃を受けました。歴史を振り返る時、そこから多くを学ぶことができます。」